

しました。しかし、さいごの願いも内務省の役人にとめられてしまいました。久敬はさびしくわが家にもどりました。けれど、そこには、妻や子どもの姿はありませんでした。

明治十二年（一八七九年）政府の手によつて、いよいよ疏水工事がはじまりました。久敬は、そのころ無一文となっていました。

わずかに残っていた郡山の荒池あらのほとりにある土地に、あばらやを建て、わずかな土地を耕たがやし、自給自足の生活をしていました。久敬は、五十七才になりました。

ある日久敬は、だれにたのまれたわけでもないが、なにか自分にできる仕事があるかもしれないと、開成山の疏水工事のところに出かけました。そこで久敬は、蒸気ポンプじょうきを使って地下水をくみ出す作業をはじめて見ました。ポンプの力にびつくりし、文明開化の波が、ここにもおしよせてきていることを強く感かんじました。そして、もう自分の時代は終わつたときとりました。